

松田善之「靈巖寺執照碑」碑陽所刻文書を通してみた元代文書行政の
一断面」(『アジア・アフリカ言語文化研究』七〇、二〇〇五年)、祖生利・
松田善之「元代白話碑文的体例初探」(『中国史研究』二〇〇六―三)など。
また、<http://www.waseda.jp/bun-tousi/teachers/jokyo/jokyo.htm> 所載
の飯山の科挙・士人層に関する諸論文も参照。

(3) 森田憲司「碑文の撰者としての知識人」(『元代知識人と地域社会』
汲古書院、二〇〇四年、二〇五頁を参照。

(い) いやま ともやす／早稲田大学文学学術院助教

エチオピアの栄光、ルワンダの悲劇

石川 博樹

日本の世界史教科書には絶望的なまでにアフリカに関する記述が少ない。その中で複数の記述が見られるエチオピアは例外的な存在である。それに対してルワンダについては世界史の授業ではなく、一九九四年に起こった大虐殺に関するニュースで初めて名前を知ったという方が多いのではないだろうか。遠く離れた両国に関係があると言うと訝しく思われるかもしれないが、それらをつなぐ鍵となるのが、私が研究を続けてきたエチオピアの高原部に住むキリスト教徒たちがたどってきた特異な歴史である。

まず、この地の歴史を概観することしよう。エチオピアの高原部では一世紀頃にアクスム王国が成立した。キリスト教がエチオピアに伝えられたのはこの王国のエザナ王の時代(四世紀前半)である。アクスム王国は紅海周辺地域に勢力を拡大したものの七世紀以降衰退し、代わってザグエ朝と呼ばれる王朝が興った。その後一二七〇年にソロモン朝エチオピア王国が成立する。王国は一五世紀に最盛期を迎え、領内ではキリスト教文化が発展した。しかし一六世紀以降オロモと呼ばれる民族の

攻撃を受けるなどして王国は打撃を受け、その版図は著しく縮小する。さらに一八世紀末に至るとソロモン朝の君主は国政における実権を喪失し、一八五五年にはソロモン朝君主を戴く政治体制そのものが終焉を迎えることになる。その後、紆余曲折を経てエチオピア高原部のキリスト教徒居住地を掌中におさめたのがメネリク二世（在位一八八九〜一九一三年）である。彼はエチオピアを植民地にしようと目論んでいたイタリアをアドワの戦いで破って独立を維持するとともに、周辺諸地域を武力で併合し、いわゆる「近代エチオピア帝国」を創りあげた。そして彼の他界後、ハイレ・セラシエ一世（在位一九三〇〜七四年）がこの帝国を引き継ぐことになる。

さて、私がこれまで主な研究対象としてきたのは、オロモの進出が始まってからソロモン朝の君主が実権を喪失した一八世紀末までのソロモン朝エチオピア王国史である。この時期のエチオピア王国の内情については研究が進んでおらず未解明の問題が少なくないが、その一つがソロモン朝に代わる新たな王朝がなかなか樹立されなかったのはなぜかという問題である。この問題を考察するためには、君主に古代イスラエル王国のソロモン王の末裔であることを求めるといふ、エチオピアのキリスト教徒社会独特の支配の正統性をめぐる観念について解説しなければならぬ。

「旧約聖書」の「列王記上」第一〇章第一節から第一三節には、シェバの女王と呼ばれる女王がソロモン王のもとを訪れ、彼の智慧に感嘆して帰国したというエピソードが語られている。もともとの記述はそれほど長いものではないが、この女王をめぐるエピソードはその後、ユダヤ教世界、キリスト教世界、そしてイスラーム世界において人々の好奇心を大いにかりたて、彼女にまつわる多様な伝説が生み出された。そしてキリスト教世界の一角を占めるエチオピアのキリスト教徒居住地においては、シェバの女王はエチオピアの女王であり、彼女はイェルサレムを訪れた際にソロモン王の子を身ごもり、その子がエチオピアの王となったとするエチオピア版シェバの女王伝説が成立する。⁽²⁾

この伝説の成立過程は謎に包まれているものの、ソロモン朝エチオピア王国においては男系でソロモン王の血統を継承していることが最も重要な王位継承資格とされていた。⁽³⁾王国には王位継承資格を持つ男子をある山の上に軟禁するという捕囚制度が存在し、この制度が機能していた時代、ソロモン朝君主の血筋を男系で継承しない者が即位することは極めて困難であった。その後一九世紀半ばにソロモン朝君主に代わって即位したテウオドロス二世（在位一八五五〜六八年）らは新たな支配の正統性を模索したものの、結局人々の支持を得ることができなかつ

た。おそらく彼らの失敗を教訓にすることであろうが、メネリク二世は自身を一六世紀前半のソロモン朝君主の末裔と位置づける系譜を創作し、ソロモン王の末裔であると自称するに至る。そしてメネリク二世の帝国を継承したハイレ・セラシエ一世は、一九三一年に公布したエチオピア帝国憲法⁴において、自身がソロモン王の末裔であることを高らかに宣言した。「ソロモン王の末裔を戴く」ことは、アフリカ大陸において例外的に独立を維持したこととあいまって、エチオピアの国際的な威信を高めるのに大いに役立つた。

さて、西欧列強によるアフリカ分割の進行と同時に、西欧人によるアフリカを対象とした各種の学術研究も進められていった。それらの中で、その後のアフリカ諸地域の運命に深い傷跡を残すことになったのが人種分類論である。西欧人たちは自らを最も進化した人種と位置づけた上で、肌の色、身長、頭骨の形状といった身体的特徴の測定という「科学的研究」に基づいて世界中の人種を分類していった。このような研究の中で、アフリカの中部・南部に住む「ふつうの黒人」は劣った人種という烙印をおされた。それに対してエチオピア高原のキリスト教徒やその周辺に居住する諸民族は、系統的に西欧人に近い「ハム系民族」と分類された。さらにこのような人種分類論に基づいて、アフリカの中部・南部に成立した王国は全て北方から到

来した「ハム系民族」が現地民を征服して形成したものである。「ハム仮説」が提唱され、「科学的な」学説として広く受け入れられていった。⁵

ルワンダを最初に植民地支配したのはドイツであり、ドイツが第一次世界大戦において敗北すると、代わってベルギーがこの地を統治するようになった。この時期、ルワンダの成り立ちについては、北方から到来したハム系民族である牧畜民のツチが、先住民であった農耕民フツと狩猟採集民トゥワを征服して王国を形成したとするハム仮説の影響を受けた見解が定説化した。この説に基づき、ベルギーの植民地官僚たちは住民をツチ、フツ、トゥワのいずれかに分類した上で「ハム系民族」であるツチを植民地支配に利用するという政策を推し進めた。この政策により、「フツ」に分類された人々は植民地支配に加担する「ツチ」に対する不満を募らせていった。

三カ月で一〇〇万人もの人々が犠牲になったとされる一九九四年のルワンダ大虐殺を引き起こした要因としては、フツとツチの対立が真つ先に挙げられる。しかしこのような「民族対立」のみで全てを説明できるわけではないことが近年明らかにされつつある。⁶ギリシア神話には獅子の頭、山羊の胴、蛇の尻尾を持つキマイラと呼ばれる怪物が登場する。「ルワンダの悲劇」を引き起こしたメカニズムはこの怪物のごとき奇怪で複雑

な存在である。そしてその要となったのがハム仮説であった。

エチオピアのキリスト教徒たちがたどってきた「栄光ある」歴史がこの仮説の成立に影響を与えたことは確実であるものの、両者の関係は未だ明らかにされているとは言いがたい。エチオピア史研究者としてその解明に努めることが私の目下の課題であり、教育に携わる者の一人として、ルワンダの悲劇およびそこから得られる教訓をどのように次世代に伝えていくべきか、模索しているところでもある。⁽⁷⁾

▼注

(1) アクスム王国の滅亡年およびザグエ朝の成立年を特定することは困難であるものの、後者については一三七年とする説が有力である。

エチオピアで最も有名な世界遺産「ラリベラの岩窟教会群」は、ザグエ朝のラリベラ王によって造営されたと伝えられている。

(2) シェバの女王伝説の展開については、薮勇造『シェバの女王——伝説の変容と歴史との交錯（ヒストリア22）』（山川出版社、二〇〇六年）を参照。

(3) エチオピアのキリスト教徒居住地における支配の正統性とソロモン王の血統との関わりについては、拙著『ソロモン朝エチオピア王国の興亡——オロモ進出後の王国史の再検討』（山川出版社、二〇〇九年）を参照。

(4) この憲法の制定にあたっては大日本帝国憲法が大いに参考にされた

ことが知られている。

(5) 一九世紀から二〇世紀の西欧における人種分類論については、栗本英世「人種主義的アフリカ観の残影——「セム」「ハム」と「ニグロ」竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを越えて』（人文書院、二〇〇五年、三五六―三八九頁）を参照。

(6) ルワンダ大虐殺を引き起こした諸要因については、武内進一『現代アフリカの紛争と国家——ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』（明石書店、二〇〇九年）を参照。

(7) ルワンダ大虐殺を描いたドキュメンタリーや映画の中で最も有名なものは、一〇〇〇名以上の人々を救ったホテル支配人の体験を描いた「ホテル・ルワンダ」であろう。この映画を見た学生たちと語り合うとき、その真剣な眼差しに身が引き締まるとともに、彼ら・彼女らの疑問に十分に答えることができない自分をいつもどかしく思う。

(いしかわ ひろき／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教)